

# 隅田河畔にて

Eizaburo Kobayashi

小林栄三郎

青山ライフ出版

隅田河畔にて  
— 目次 —

序章	隅田川のほとりで……………	5
第一章	荒れ狂う炎の中で……………	11
第二章	焦土の中で……………	29
第三章	焦土の中から……………	55
第四章	戦後、亡びゆく人たち……………	71



序章 隅田川のほとりで

秩父連山の主峰、甲武信岳に源を発し、秩父の山々の水を集め、関東平野を流れ下り、東京の東部を貫流して東京湾に注ぐ川の流れは、東京の旧市内へ入るあたりまでが荒川と呼ばれ、千住の大橋をくぐって、荒川放水路を左に分け、鐘ヶ淵あたりで大きく右へ屈曲し、向島、浅草、蔵前、日本橋、深川、築地、佃島、月島を左右に見て、河口に至るまでが隅田川と呼ばれています。

この間、白鬚橋に始まり、言問橋、吾妻橋、駒形橋、蔵前橋、両国橋、清洲橋、永代橋、勝鬨橋など、その時々時代の橋梁構築の技術の粋を尽くした、多くの橋が構築の美を競っており、春の花の季節には、陸の岸辺を行く人々だけではなく、船で水上を行く人々の目を愉しませてくれる、桜の名所もありました。

私が生まれ育ったのは、向島の隅田川の土手下で、近くの墨堤には、明治の立志伝中の実業家、大倉喜八郎が自らの存在の証として建てさせたと言われている、大倉別邸と呼ばれる豪邸と庭園がありました。ここには、大倉氏晩年の愛妾、お玉さんが住んでいたこと、氏が経営する帝国ホテルのコック長が馳走の采配をふるい、時の名士たちが招かれて開催されたパーティ

の数々、明治天皇もここでの月見の宴に行幸されたことなど、華やかな話題の花咲いた場所でもありました。

私の少年時代の向島の隅田川は、まだ季節になればハゼを釣る釣り人たちとそれを眺める人たちが、河畔の土手に並んで腰下ろしていたり、土手の桜並木の花びらが川面に降り注ぎ、人々が花吹雪を浴びながら土手をそぞろ歩いたり、早慶のレガッタで若者たちが渾身の力で漕ぐオールに、水しぶきが上がることもありました。

しかし、また他方では、上流の流域の工場地化のため、工場廃水による汚濁が始まっており、白魚の泳ぐ清流というのはもはや祖父たちの語り草でしかなくなっていました。夏になっても、この川は、岸辺から離れて突如始まる深みによる危険と、衛生上の配慮から、水遊びは禁止されてきました。それでも流域の子供たちは、時々見回りに来る水上警察のランチの監視の目をくぐっては、流れに飛び込んでいたものです。言問橋まで出向いて、橋の欄干から川面に飛び下りることは、流域の子供たちの間で勇氣ある男の子の通過儀礼でありました。夏休みが終わって登校した最初の日の朝礼で、校長先生が過ぎ去った夏にこの川で水死した子供の名を挙げ、全校生徒で黙祷を奉げたりすることもありました。これは、この川の名に結びついて、この川

の流域の子供たちが出会う最初の死の形でありました。

この川の名と結びついた死の形といえば、古くは鎌倉、室町の時代より現代に至るまで、この流域の人々に伝えられた、もう一つの親と子の死の形がありました。鎌倉・室町の頃には、物語、説話の類によると、京のあたりで人さらいにさらわれて、東国方面に売られてしまう、親と子、母と子の別れの悲劇が語り伝えられていました。この母と子の別れが死のモチーフと結びついた一つの例が、謡曲「隅田川」で語られています。

子をさらわれて狂った西の女が、子を探し求めて東へ下り、隅田川のとある渡し場にたどり着く。そこでは、この川で死んだ人々のための大念仏の法要が行われようとしている。わけを聞いた渡し守に案内されて行った大念仏の行われる場所は、女が捜し求めていた子供、梅若丸の埋葬された墓のある墓所であったのである。女は一心に念仏を称えることにより、わが子梅若丸の亡霊を呼び起こす。しかし、母親の如何に切なる念仏といえども、死んだ子をこの世に呼び戻すことはできない。わが子梅若丸の亡霊は、夜が明けると共に消え去って行く。